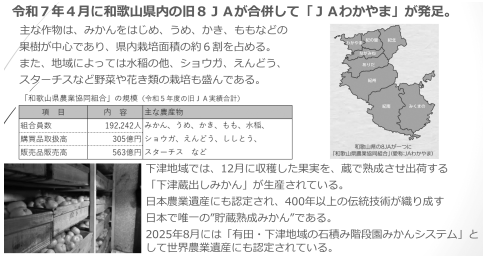
すべての農家を防除名人へ！
～個別防除処方箋作成による農家所得向上～

土谷（つちや） 賢太郎（けんたろう）
和歌山県・JA わかやま しもつ営農生活センター
※本稿は2025年11月に行われたTAC・出向く活動パワーアップ大会での発表より構成しています

JA わかやまの概要

当JAは、令和７年４月に、県下８つのJAが合併しJAわかやまとなりました。特徴は、みかん、うめなど農産物の約６割が果樹で構成されています。私の所属する下津地域では、蔵で寝かせて出荷する「下津蔵出しみかん」の産地として有名です。８月に「有田・下津地域の石積み階段園みかんシステム」として世界農業遺産に認定されました。



1．農家とJAの現実

出向く活動は、重点訪問先を決め、情報提供や事業推進などの業務にあたっており、私の主な活動は、営農指導を中心に、肥料農薬の提案や推進等を行っています。

- ＪＡわかやま発足以前から旧ＪＡ単位で出向く活動担当者を設置し、重点訪問先への定期的な訪問・提案活動を展開している。
  - ○令和６年度末時点（旧８ＪＡ合計）
    - ・重点訪問先：1,116戸（担当者1名あたり平均29戸）
    - ・担当者：38名（内、専任10名　兼任28名）
    - ・配置場所：支所、支店、営農センター
  - ○主な活動内容
    - ・営農指導、補助
    - ・生産、生活資材の情報提供及び推進
    - ・肥料農薬等の予約推進及び予約書回収支援
- 取り組みは平成２５年からスタートし、今年で１４年目を迎える。

出向く活動の概況

出向く活動をしているなかで、農家からよく聞く話があります。「毎年同じ薬ばっかりで大丈夫か」「み

かんに病害虫の被害があるけど、農薬の効果は出ているのか」などです。そして、「もっときれいなみかんを作って儲けたい」という話を一番耳にします。そのため、個々の農家所得向上に向けて、園地にあわせた個別防除暦の作成、これがカギになるのではないかと考えました。

農家がJAに求めていることは、やはり営農面の悩みを解決したい、正しい情報を取り入れたい、そして所得向上につなげていきたいというところだと思います。しかし、JAも人手不足ですし、ベテラン勢の離脱によって知識や技術の不足感が否めません。そして、それが農家とJAの関係の希薄化につながっているのではないかと感じています。

私は、常日頃より「JAの最大の商品はモノではない。技術ある職員である」と考えながら活動しています。農家との関係を深め、所得向上に直結する３つのことを実践しました。

２．所得向上に直結する３つのこと

１つ目は、現場の声を反映した実用的な試験研究です。農家は防除に時間とお金をかけた分、所得を向上させたいと願っています。そこで、徹底的に薬剤の試験研究を行い、そのデータを活用し現場で成果を出せるようにこだわりました。

２つ目は、農家へ効率よく指導するための情報伝達です。良いデータ、良い技術をどのように伝えていくか、様々な角度から考え直しました。

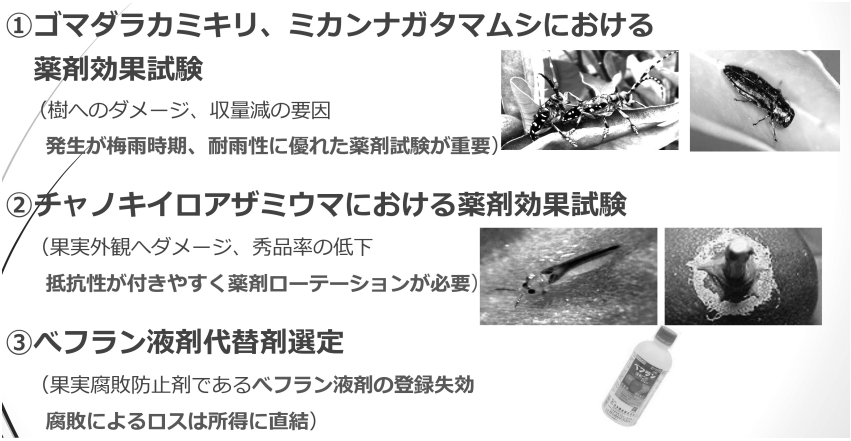
３つ目は、農家の本音を知り、真正面からとことん向き合うことです。アンケート結果や防除結果を分析して評価し、結果を突き詰めることにこだわりました。

⑴　現場の声を反映した、実用的な試験研究

実際に行った取組みとして、まず１つ目は、みかんの害虫であるゴマダラカミキリへの薬剤効果試験です。梅雨時期に発生するため、農薬がどの程度雨に耐えられるかという試験を行いました。

２つ目のチャノキイロアザミウマは、薬剤抵抗性が問題となっていたため、ローテーションする薬剤を検討しました。

３つ目はベフラン液剤の代替剤の選定です。ベフラン液剤は、みかん



試験研究の例

を腐敗から守り、商品ロスを軽減する殺菌剤です。この農薬が令和７年10月に登録失効予定となっていたため、和歌山県果樹試験場と連携し合い、代替剤の試験を行いました。

このような試験はほかにもたくさんありますが、事例を積み重ねて適切な農薬を選定しています。また、試験データを農家がわかるようにかみ砕き、資料にまとめたものを講習会や普段の畦道指導に活かしています。この取組みにより、「病害虫のことなら土谷に聞けばOK」という習慣ができつつあります。また、農家が関心を持つことで、農薬についての農家同士での会話が増え、産地内のレベルアップにもつながりました。

⑵　農家へ効率よく指導するための情報伝達

正しい情報をどのように伝えるのか、という点も考えました。

まずは営農情報誌『からたち』です。こちらは農業月刊誌のようなもので、そこに連続50か月以上、殺虫剤や害虫に関するコラムを記載しました。これは農家へ十分浸透し、「『からたち』と言えば土谷」と言っていただいています。

２つ目は、LINEや部会員メールを活用し、病害虫が発生した際、すぐに通知できるようにしました。

３つ目はYouTubeチャンネルを開設し、防除以外にも農作業のコツなどを配信しています。みかんの剪定動画については2.6万回再生されました。

４つ目は、試験結果をもとに、害虫同時防除リストを作成しました。それを様々な会合で配布し説明をしています。

５つ目は、新規就農者向けに「かんきつ塾」開催です。年10回行い、みかんづくりの基礎知識を伝えるだけでなく、篤農家から得た知識を若い後継者となる担い手のみなさんへつなげる場となっています。

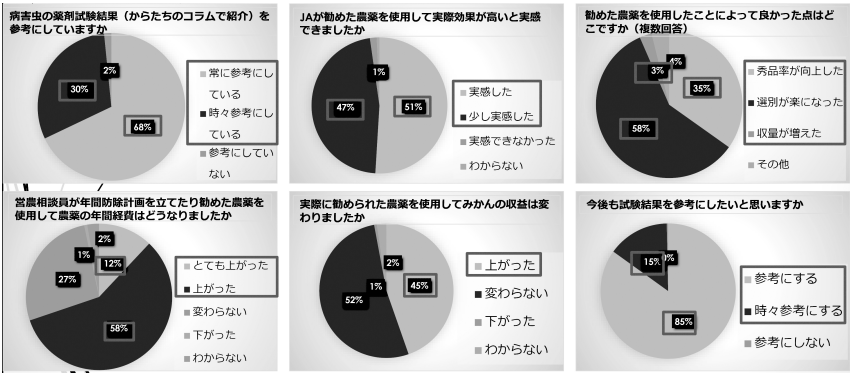
⑶　農家の本音を知り真正面からとことん向き合う

たとえば、「JAがすすめた農薬を使って効果が高いと感じましたか」というアンケートでは、ほとんどの方が「実感した」と回答しました。

続いて、「実際にすすめられた農薬を使用してみかんの収益が変わりましたか」という問いには半数近くの方が上がったと回答しました。

また、変わらなかったという方も、「すすめた農薬を使用したことによって良かった点はどこですか」という問いに対して、９割以上の方が秀品率が向上した、選別が楽になったと回答されています。

秀品率が増え作業が楽になったということは、労働時間や人件費の削減につながり、非常に大きなメリットを発揮できたといえます。



アンケート結果

３．個別防除の作成

このように、農家に満足していただけるよう一番心掛けたことは、一人ひとりに向き合ったきめ細やかな対応です。園地によって日当たりや風向き、気温などが異なり、病害虫の加害時期や種類が大きく変わることがあります。そのため、全員に対して一律の防除指導では補いきれない部分が必ず出てきます。100人の農家がいれば悩みや課題も100通りです。つまり一人ひとりに向き合うことが一番重要だと考えます。

そこで、個別防除暦を作成することにしました。これは、園地を巡回して病害虫を特定し、薬剤を選び、農家の立場に立って作成したものです。この個別処方箋により、園地ごとの問題を解決しました。

この個別防除暦作成のコツは、①現場に行って診察、診断、②年間防除可能回数を確認、③データに基づいた薬剤選定、④タンク・薬液量の計算、⑤とにかく農家の立場に立つ、この５つを意識して作成しています。なかでも、③にもっとも重きを置いています。

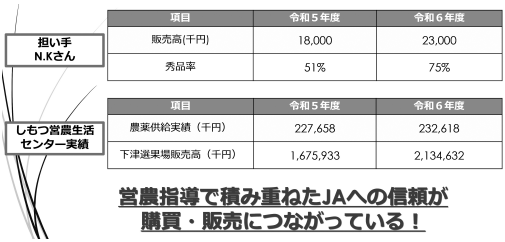
４．担い手・農家からの声、成果

担い手Ｎ・Ｋさんは70代の女性で、40代の息子と二人でみかんを作っています。息子さんからは「害虫、病気が全然治らないので一度見に来てほしい」と相談があったため、園地に出向き、観察し、病害虫を特定しました。すると「自分の畑で何が問題になっているかよくわかった。助けてくれてありがとう」と言っていただきました。

その結果、秀品率が向上し収量も増え、1,000万円以上の増収となりました。農薬の系統利用も増え、今では肥料・農薬あわせて90％以上の利用率となっています。

担い手M.Kさんは、40代の夫婦とその両親、計４名で営農する担い手です。「今までは父の言うとおりやってきたけど、畑ごとに応じた指導はしてもらったことがない。農薬はこうやって使い分けるんだ。ちょっと興味がでてきた」という話もいただきました。指導後は秀品率・所得が向上し、「みかんづくりがますます楽しくなってきた」と言ってい

ます。こちらの担い手は、JA低利用から全利用に変わり、県下のJAで唯一、しもつ営農生活センターにある肥料の配合設備を利用したオーダーメイド配合肥料を提案し、現在もご利用いただいています。



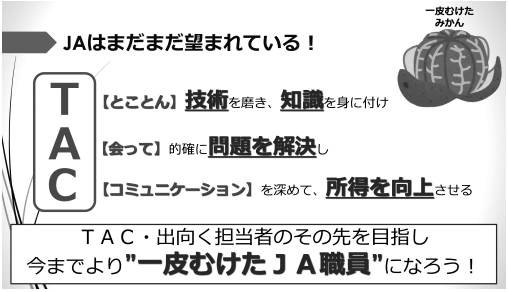
担い手、JAの成果

しもつ営農生活センターとしても、農薬供給高、販売高ともに、実績拡大につながっています。令和６年産の選果場販売高の拡大については、みかんの単価が非常に高かったということもありますが、先ほどのアンケート結果からもわかるように、指導による品質向上が必ずあると思っています。そしてその部分がJA職員の本当の価値です。

最後に

JAは、産地や農家にまだまだ望まれています。私が出向いて指導するなかで、「職員さんみんながこんな取組みしてくれたらいいな」「こんな人が増えてほしい」と口々に言われることがあります。TACのキャッチコピーは、とことん、会って、コミュニケーションですが、そのうえで何をするかが重要だと考えています。「とことん技術を磨き、知識を身に付け」「会って的確に問題を解決し」「コミュニケーションを深めて所得を向上させる」これが農家から望まれるJA職員の姿ではないでしょうか。

これからも自己啓発を続け、一皮むけたJA職員となり、全国の皆さまとともに、農業発展の一助になれたらと思います。



全国のTACのみなさんへ